



「こども」とは、だれか？

力のない者、何か足りない者、”おとな”に及ばない者、泣き虫、子ども騙(だま)し。子どもをイメージする言葉は数多くある。法によれば、二十歳成人や十八歳未満の文言、児童福祉法の定めや区分があり、「児童・生徒・学生」は法律用語でもある。

■

高校3年生や大学1年生は、親にしてみれば、まだ「こども」ということになるか？ 世間話で交わされる「こども」は関係性の理解

で用が足りる。しかし、今どきの「若者／子ども」、あるいは、子ども向けや子ども対象については曖昧である。つまり、イメージされる「こども」とは？ 子ども向けイベントで集まってみれば、低学年ばかりで高学年がとまどうことも。

乳幼児の発達や「こども」の遊びを問うケースでは、「こども」の概念をはっきりさせておきたい。



漢字「保」 甲骨文字

壊れた排水路の雨水を浴びる

一九八〇年頃・神戸市須磨区



「こども」ナビ

- #12) 「主体性 (主体) について、理解」を試みる
 - #13) アカデミックな「子ども期 Childhood」理解
 - #14) 進化に沿ってヒトの発達を考える
 - #15) 子供、子ども、子どもたち、等々 | 神経神話
 - #16) いつから「おとな」で、遊びを考える。
 - #17) 「九歳の旅立ち」を命名する
- この冊子の4ページ→) 年齢による発達段階



おとなは、子どもにもどれない
子どもは、おとなをモデルにする
The Renaissance of Childhood

遊びは 個所有のみならず
社会 (つながり) の現れである

子ども期 Childhood のすべてが、個人の将来、社会 (地球) の未来を決定づける。その再生を謳うことは喪失を憂うからだ。社会の生産性を優先してきた結果だ。まずは「こども」とは、だれか？ から始めよう。



おとなの立場で年少者を認識するとき「こども」かどうかは、わが子と他人とは違うだろう。既婚者となっても親にはいつまでも「こども」と思ってしまう。以下、自立した個として「こども／おとな」区分を考えたい。こどもからおとなになるまでの間を3期にわける（山田利行オリジナル）。

第1次主体形成期 誕生～およそ2歳半ば

母から生まれ出たそのときに始まり、およそ2歳半ばぐらいまでであろうか。親（母）子のあいだに「間主観性」で説明される主体形成の時期がある。やがて母から離れ、母とは限らない他者（人とは限らない）とも、間主観性は成立する。鯨岡峻は「相互主体性」を主張し、間主観性の成立時期も個の確立として個の主体性は存在するという（※2）。

※2……鯨岡峻『ひとがひとをわかるといふこと 間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房 2006年

p148

//間主観的にわが子の気持ちが分かるのは、まずもって子どもを一個の主体として尊重し、その気持ちを受け止めようとしているからこそです。//

p148

//ここに、養育者側からの間主観

的な把握が生まれる条件として、相互主体的な関係の問題が見えてきます。

他方、乳児の方も、自分の思いを養育者に受け止めてもらえることを当然のこととして（基本的信頼）、自分を表現し、周囲世界に出かけたり、関わったりして、それを取り込み、自己発揮していくこととなりますが（主体の一方の面）、そうしているうちに、自分が信頼を寄せているその他者も、単に自分の要求を満たしてくれるだけの人ではなく、その人の様子があるのだということに少しずつ気づき始めるのです（主体のもう一方の面）。この主体の二面性が形成される過程が、相互主体的な関係においてであるということ、これがいま私がもっとも強調したいところです。//



主体性理解は必ずしも容易ではない。

「主体性（主体）について、理解」を試みる #12) ◀

第2次主体形成期 小学3年生,4年生 8~10歳

「こども」から「おとな」への移行期

小学3年生と4年生、年齢では8歳から10歳までの期間、「おとな」への移行期として第二次主体形成期が現れる。およそ8歳までの幼児期と別れ、新たな主体形成に進む。身体的には「こども」だが、心(精神)は変容し自立の様相を高める。昆虫に喩えて申し訳ないが、終令前のさなぎまたは幼虫で、成虫/羽化への準備をしている。

第二次主体形成期の終了でもって「おとな」になる。小学5年生から「おとな」だ。日常生活の感覚では違和感があるかもしれない。わが子は自立したいと思っているだろうし、主体的思考や行動をとるだろう。「いつから〈おとな〉で、遊びを考える」で「つまずきの乗り越えかた」を述べた。つまずいたときに「おとな/年長者」が手をさしのべる、ということでのよいのではないか。

あかちゃん(乳児)を除いて「こども」とは、4年生、9歳まで!(が、わたしの考えかた)

加古里子『伝承遊び考 4 ジャパンけん遊び考』小峰書店 2008年 // 江戸時代までの、日本の大人たちが生活していたのは、身分制階級社会であり、子どもはそうした大人に対して小人、小供の存在であり、明言するなら添加者、邪魔者、ガキでしかなかった。したがって子どもに関する事など、よほどのことがない限り、文書や記録から除外されるのが常であり、ましてその遊びなどは「児戯に類する」どころか「児戯そのもの」であるから無視されるのは、当然であった。しかしそんな時代でも子どもは存在し、そして間違いなく遊んでいた。//



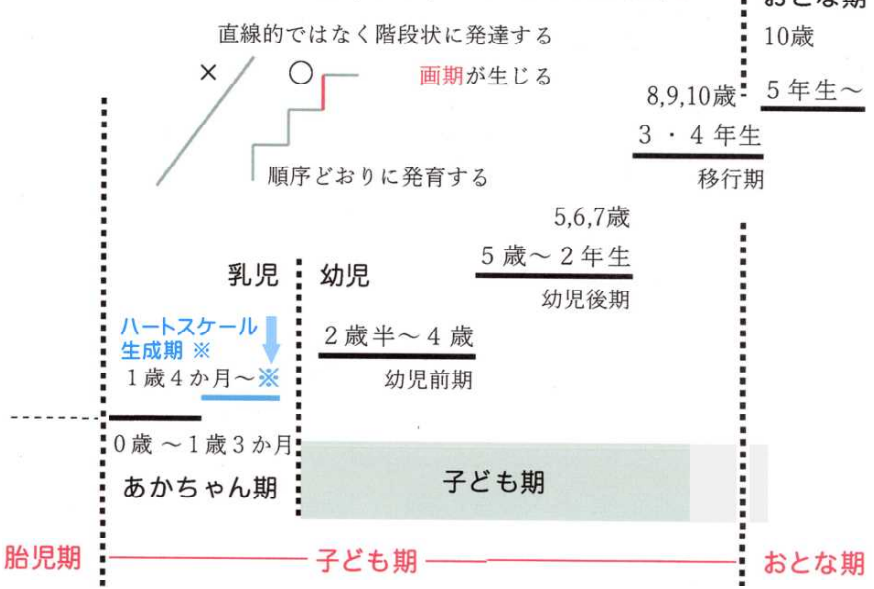
たこあげ

第3次主体形成期 高校2年,3年 ~ およそ25...30歳

高校2年生から3年生頃。見当外れかもしれない。年齢の幅を具体的に提案できるようなイメージが湧かない。シームレスながらも画期として認められないだろうか。人類の"成人"として認知される。

脳の発達には25~30歳で最終段階に到達するという(山口和彦『こどもの「こころと脳」を科学する』ジャパンマシニスト社 2022年 p56)。肉体、心(精神)の発達について、やっとこさ「おとな」に到達する。

年齢(学年)による発達段階



「子ども期/おとな期」対照図

- 夢7 ゆめセブン
- 育6 そだつロク → #17
- 愛7 ラブリーセブン

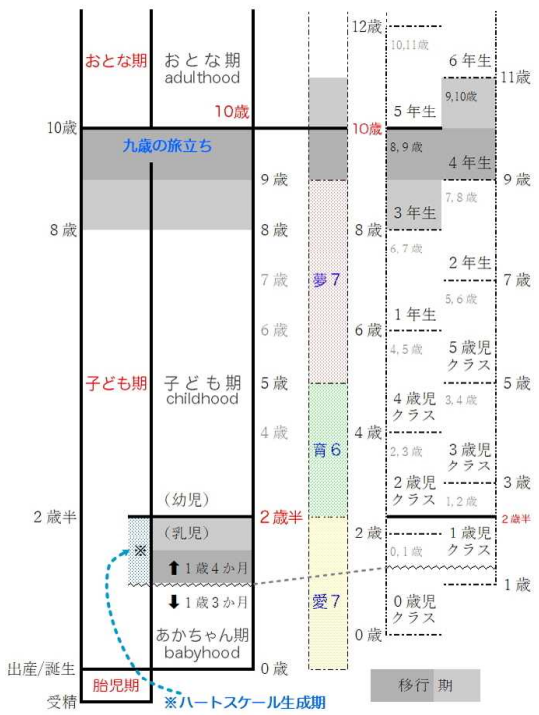
ハートスケールとは

人は《「感動」という名のものさし》を持っている。ものさしだから計ることができる。そのものさしは人によって皆違う。

ものさしというからには、ものさしのかたちをイメージしてかまわないが、「かたち」はない。想像上のものさしだ。計る道具にたとえているが目盛りはない。何を計るのか？

「気持ち」を計るものさしだ。

人は、育ってきた環境、さまざまな体験・学習をとおして感性や価値観を持つようになる。好きなこと、得意なことは前向きに取り組もうとする。その**前向きになれるものさし**を持っていると考える。ものさしを「ハートスケール」と名づけてみた。



資料通番 11..ver.01 The Renaissance of Childhood 2024.2.4

「こども」とは、だれか？

山田利行

拡散歓迎 複写可 (許諾無用)

<https://193pub.com/>